講演会「島本町と東大寺」

令和元年10月6日（日）
島本町教育委員会
木村　友紀　氏

東大寺の荘園「水無瀬荘」が存在したことや現代にも東大寺という地名が残るように、島本町は奈良の東大寺と縁の深い地です。「水無瀬荘」は、東大寺造営中の天宝勝宝年間に、聖武天皇の勅により東大寺に施入された荘園です。東大寺領の荘園の中でも面積が狭く、収益よりも交通の拠点をおさえる目的で東大寺に施入されたものと考えられます。その後、戦国時代頃まで東大寺領として残っていたようです。このことから、鈴谷瓦窯跡も発見当時は東大寺の瓦を焼いた窯ではないかと言われていました。しかし、現在では、東大寺の造営年代が奈良時代の中頃（750年前後）であるのに対して、鈴谷瓦窯跡は飛鳥時代末頃の窯跡であることがわかり、東大寺造営のための瓦が焼かれた窯ではないことが判明しています。

鈴谷瓦窯跡の発掘調査は、昭和29年10月に行われ、登り窯跡が2基見つかりました。長期間露出していたためか、窯跡内部に瓦はほとんど残っていませんでした。少量ながら丸瓦・平瓦は見つかっていますが、文様の入った軒瓦は見つかっていません。平瓦は、奈良時代の一枚作りが普及する前の桶巻き作りで、平瓦凸面はタタキの痕跡を消すものと残すものが存在します。発掘調査は、当時、大阪府教育委員会の技師だった藤澤一夫氏が指導を行い、島本中学校（現在の島本町立第一中学校）の教諭井上栄光氏が生徒たちと発掘調査を実施しました。発掘調査後、鈴谷住宅が建てられて、現在はさらに住宅化が進んでおり、鈴谷瓦窯跡の正確な位置はわからなくなっています。また、どこの寺院にための瓦を焼いたのかもわからない謎の多い瓦窯跡です。

次に、鈴谷瓦窯跡の近くにある御所ノ平遺跡についてです。こちらから竪穴式住居が1基見つかっていて、その中から瓦が数点と粘土の塊が出てきています。このことから、瓦工人達が住んでいた住居跡である可能性が示唆されています。住居内から出てきた土器の年代が飛鳥時代の末頃のものであり、鈴谷瓦窯跡の年代も飛鳥時代末頃であることを裏付けられています。

ではここで、島本町の遺跡から離れて同時代の瓦を見ていきます。

世界最古の木造建築物の法隆寺五重塔の平瓦は、きれいに裏面のタタキの痕跡が消されています。元興寺極楽坊は、飛鳥寺から運ばれた日本最古の瓦が、現在も一部に葺かれていることが知られている寺院です。今回展示しているのは、平城京移転後の奈良時代に製作した瓦で、奈良時代に成立した一枚作りで作られています。

次に奈良県北葛城郡河合町の長林寺の丸瓦です。長林寺は推古24（616）年に聖徳太子が建立したと伝えられるもので、本格的に伽藍が整ったのは7世紀後半のことです。今回展示している丸瓦は、鈴谷瓦窯跡の年代と近く、玉縁を用いない行基葺きの無段式の丸瓦です。

次に藤原宮の瓦です。藤原京は持統8（694）年から和同3（710）年の間、日本で初めて都城制を敷いた都です。今回は、藤原京の宮殿に使用された軒丸瓦と軒平瓦を展示しています。軒丸瓦は中房部分が非常に大きい複弁蓮華文で、軒平瓦には偏向唐草文が採用されています。

講演会「水無瀬駒製作と時代背景」

令和元年10月20日（日）
歴史文化研究所 調査員
小泉　信吾　氏

水無瀬駒は水無瀬兼成が突然と作りだしました。そのメモ帳である『将棊馬日記』（通称『駒日記』とします。）が水無瀬神宮に保存されています。いつ頃から将棋の駒を書き駒で作ったかという記録はあまりありません。兼成の祖父にあたる三条西実隆は能書家として、また華道でも有名で当時の一流の文化人でした。『実隆公記』によると、駒文字を書いてくれという依頼があったようですが、どういう駒文字かは実物が残っていないのでわかりません。

実隆の子の三条西公条は、記録では駒文字は書いていません。この三条西公条の次男が水無瀬家の養子になり水無瀬兼成となりました。兼成は書家としても有名なので、駒文字を書く依頼が増えてきます。駒日記によると、戦国武将、貴族、公家、天皇、有力商人などに駒を書いています。

水無瀬駒を製作したのは、兼成と養子になった親具、兼成の嫡子の氏成、孫の兼俊です。現在残っているのは水無瀬兼成と孫の兼俊の駒です。水無瀬駒を復刻した駒師の熊澤さんが『枻』という雑誌に、駒の製作数をまとめられています。それによると、始まりは天正18(1590)年、終わりが亡くなる1602年。駒数37108枚でかなりの数です。1590年代は、秀吉が天下統一をして世の中が落ち着く頃で、将棋の駒だけではなくて和歌、お茶、花など文化的なものが凝縮されて非常に高度になってくる時代です。その中で作られた水無瀬駒は非常に品のある駒です。

駒の製作は、駒を削る職人を水無瀬家で抱えていて、注文があると職人が駒を作り、水無瀬さんが駒文字を書くという形で製作していたと思います。ですから何百枚もの駒を一気に納めるということは、それなりの対価を要求できたと思いますが、それについては書かれていません。

駒を納めた主たる先は、豊臣秀吉で、次に秀次です。秀次は秀吉に秀頼が生まれたことで、自害に追い込まれますが、その前に貴族の間では秀吉の後継者は秀次だということで、駒を大量に納めています。記録によると、山崎の戦いが終わった時に、兼成は天皇の勅使として秀吉のところに行って会っています。秀吉が亡くなった後、秀頼にも駒を献上しています。単に駒を作ったというだけではなくて、その時代背景が駒日記からわかります。

慶長３（1598）年に、「象牙道休」と書いています。足利義昭が将軍を辞した後の名前が道休です。しかし、慶長２年に足利義昭は亡くなっているので、慶長３年に象牙の駒を道休に納めるというのは矛盾します。今後の研究でもっとはっきりするかなと思います。その駒は、現在福井県の方がお持ちです。実際、『駒日記』には象牙の駒が何組かありますから、その一部であるというのは確実にいえます。

次に、考古学の話です。旧大阪市文化財協会が大阪城下町を発掘した時に出土した「銀将」と「桂馬」、それから京都の御土居から出土した「銀将」の駒を比較すると、私の判断では水無瀬駒とまでは言いませんが水無瀬の範疇に入る、あるいは水無瀬を写した駒といえると思います。水無瀬駒は分厚いです。そういうことで出土駒からみると、大阪・京都近辺にこの水無瀬駒は出ています。

次の奈良時代初頭の平城宮の軒丸瓦は複弁蓮華文であり、周囲に珠文帯と線鋸歯文が施されています。軒平瓦は均整唐草文です。奈良時代以降は、この均整唐草文が軒平瓦の文様の主流となります。

次に東大寺の瓦です。文様は同じく軒丸瓦には複弁蓮華文、軒平瓦には均整唐草文を採用しています。東大寺は、天平15（743）年に大仏殿造立の詔が発せられて、天平宝字2（758）年に大仏殿が竣工しています。その大仏殿建立に大きな役割を示した行基は、東大寺造営以外にも多くの寺院造営や土木工事に携わった人物です。島本町内では、若山神社や勝幡寺、尺代地区の釈恩寺、大山崎町の宝積寺が行基の開創だといわれています。『行基年譜』によると、山崎院や山崎橋が行基によって造営されており、大山崎町周辺では実際に行基が活動していたことを知ることができます。

では、鎌倉時代の瓦に移ります。東大寺大仏殿は、治承4（1180）年に平重衡の焼き討ちによって焼失し、その再建に尽力したのが重源です。重源は地方から資材をかき集めて東大寺の復興を行った人物だといわれています。今回展示している軒丸瓦・軒平瓦も岡山県（備前）の万富窯で焼かれ、東大寺へ運ばれたものです。文様面に「東大寺大仏殿」と寺院やお堂の名前が書かれているのが特徴的で、展示している瓦の中で最も大きいものです。建仁3（1203）年に藤原定家が水無瀬離宮を訪れた際に重源と会っており、同年の東大寺総供養の際には後鳥羽上皇も参列しています。

では次に水無瀬離宮の瓦も見たいと思います。水無瀬離宮は正治元（1199）年頃に後鳥羽上皇が造営した離宮で、その中心地は現在の水無瀬神宮付近だと推定されています。水無瀬離宮の範囲は文献や地形、検出した遺構の位置から、現在の広瀬や百山、桜井地区にまたがるものと考えられます。水無瀬離宮関連施設は、広瀬遺跡と西浦門前遺跡で見つかっています。宝相華文軒丸瓦と均整唐草文軒平瓦は広瀬遺跡から出土したもので、中房に卍を記す複弁蓮華文軒丸瓦と剣頭文軒平瓦は西浦門前遺跡から出土したものです。広瀬遺跡の瓦は甍棟の部分、西浦門前遺跡は築地塀に使用されたもので、同時期の東大寺の瓦と大きさの違いを見ていただきたい思います。

特殊な瓦も帝塚山大学よりお借りしているので、紹介したいと思います。

次の軒丸瓦・軒平瓦の文様は、宝塔文と呼ばれる瓦の中でも五輪塔を描いたもので、平瓦には五輪塔の文様が押印されています。軒丸瓦は蓮華文様か巴文様、軒平瓦は唐草文が採用されることが多い中、珍しい文様のものです。

安土桃山時代には、瓦の文様面に金箔を貼る金箔瓦や朝鮮半島から伝来した文様部分が逆三角形を呈する滴水瓦が登場します。

今回は、平瓦凸型成形台・平瓦凹型調整台・丸瓦凸型調整台・桔梗文の軒丸瓦の笵など瓦を造るための道具もお借りしました。近世以降の瓦生産は「江戸名所図会」に、その様子を見ることができますが、近世以前の瓦生産もほぼ同じ工程で製作されていたものと思われます。

終わりにですが、本企画展では、東大寺の瓦を焼いた窯ではないかと考えられていた鈴谷瓦窯跡と、東大寺の瓦や同時期の瓦との比較を行いました。鈴谷瓦窯跡が東大寺造営の年代が一致しないので、東大寺の瓦を焼いた瓦窯跡であるとは言い難いですが、鈴谷瓦窯跡は島本町の地域史を語る上で重要な遺跡であると考えます。軒瓦が見つかっていませんので、鈴谷瓦窯跡の瓦がどこに供給されたのかを探ることは難しいですけども、もし解明できたら島本町の古代の豪族の支配関係や国家との関わりを探ることができる重要な遺跡だと考えます。ご清聴ありがとうございました。